

参加費は教育内容の提供による 感謝代と思っって指導を

公益財団法人育てる会 会長 青木 孝安

保護者の声に耳を傾ける

夏の活動が終わり、大勢の保護者からのアンケートが返ってきた。

一人ひとりの声に耳（心）を傾ける。

今回は特に、「ファミリー班」参加保護者の声に注意を傾けてみた。

育てる会では、自立心を養うため、活動参加に際して、子供は親や家庭と離れて単独で参加することを原則としている。従って、活動の様子について、第三者の意見、感想を聞く機会が少ない。その点、ファミリー班は保護者が参加するので、活動全般について客観的な意見を聞く唯一の機会と思うからである。

一人の保護者は次のような意見を寄せている。

「若い職員の方たちの働きぶりに感動、感心しました。ただ、お仕事がたくさん

あって、忙しそう。こういうキャンプに参加している親たちは、高級ホテルのサービスを求めているわけではないので、掃除とか、湖での準備とか、もっと仕事を振っていいと思いました。親一人で参加しているおうちは難しいと思いますが、手が空いている人は結構いるので、……。あと、ソバ打ちなど、大人も楽しめる企画があつてよかったです。ほかの家族と三泊四日、一緒に過ごす機会はめったにありません。『上手に子育てしているなあ』、と感じる方に直接お話を聞くことができて、『へー』、と思うこともたくさんありました。』

この保護者の言わんとしている意味は、「親も進んで活動に参加しよう」、「ソバ打ちなど親にとっても新しい体験である」、「他人の家庭の子育てを学ぶこと」などを指摘して、そこに保護者の参加する意義を語っている。

私はこの保護者の言葉を聞いて、かねてから育てる会の指導者たちに言ってきた、指導に関する私の考えを思い出した。

保護者から徴収する参加費は食事と宿泊などの、その奥にある教育価値（内容）を提供することによりいただく代価（費用）であるという考えで指導に当たるといってききた。その意味からして、この保護者は育てる会の趣旨を理解して参加していると思ひ嬉しく思うのである。

指導者は食事献立に「縦」と「横」の視点を持つこと

一人の保護者から食事献立について、次のような感想が寄せられた。

「毎回出る、食事のレベルの高さに感心しました。団体食にありがちな、加工メニューではなく、きっちり調理されたものを毎回用意して下さったことに感謝します。施設はさすがに老朽化が目立ちますが、必要なものは過不足なくありました。」

私は、かねてから、子供に提供する食事献立をみれば、その団体の子供に対する愛情が分かると語ってきた。厨房担当者には、食材の調達に当たっては「金銭の多寡より質を考えろ」、とも言ってきた。

献立の基本は二つの視点に置くように言ってきた。

まず食における「縦」——時間の経過——の視点を持つように、と。これはその土地の歴史的食文化を取り入れることである。その土地には昔から食べ続けられてきた伝統的な食がある。それらを積極的に取り入れること。八坂村の場合は、おやき、そば、おきゅうと他など。おやつとしては、饅頭やビスケットの天ぷらなどがある。これらを提供する場合に指導者の解説をつけることにより、教育性が生まれる。

ところで、アンケートの一文に、「昼は水団すいどんと炊き込みご飯のみで、おかずはなかった」、との感想が書かれていた。

水団は食文化から見れば、麦を食材料とした江戸時代以降の日本人庶民の主食であった。本来は大きなどんぶりに盛られた水団のみをもって食事としたのである。特に、戦争中の「代用食」と言われた時代の水団にこそ、水団の極意があるように思う。水団は大きなどんぶり一杯に盛られたものであり、おかずなどはないのが本来のものである。水団食は生きるための食であり、好き嫌いなどで食べるものではなかった。指導者がこの意味を詳しく解説することにより、水団食に教育性が付加されると思う。

次の、食における「横」の意識とは、食材料の広さのことである。子供にできるだけ多くの食材料を好き嫌いなく食べる習慣を身につけさせたいと願い、そのような献立を考えるには、出来るだけ献立の「いろどり」を想定してみることを勧めている。子供の前に出された料理に赤や黄色、緑の色がみられるようにすることである。それともう一つ、できるだけ地域の食材を、季節の変化に従って取り入れることである。季節の変化に応じた食材を取り入れることにより、食材の幅は大きく広がる。

かつて、支部の指導者が各自の一月の食事献立の写真を持ち寄って、比較検討したことがある。地域の食材を季節の変化に応じて豊かに取り入れる献立の必要を感じた。主食と汁椀、主菜に五品以上の副菜を添えることを標準とした。子供がどんな食材も好き嫌いなく食べるようにするには集団生活がまたとない機会と、長い間の食事指導の経験を通して強く感じ、それを保護者たちにも訴えたいのである。

※「おきゅうと」は北九州の安曇族が伝えた海藻食のこと